



# 環境経済論A

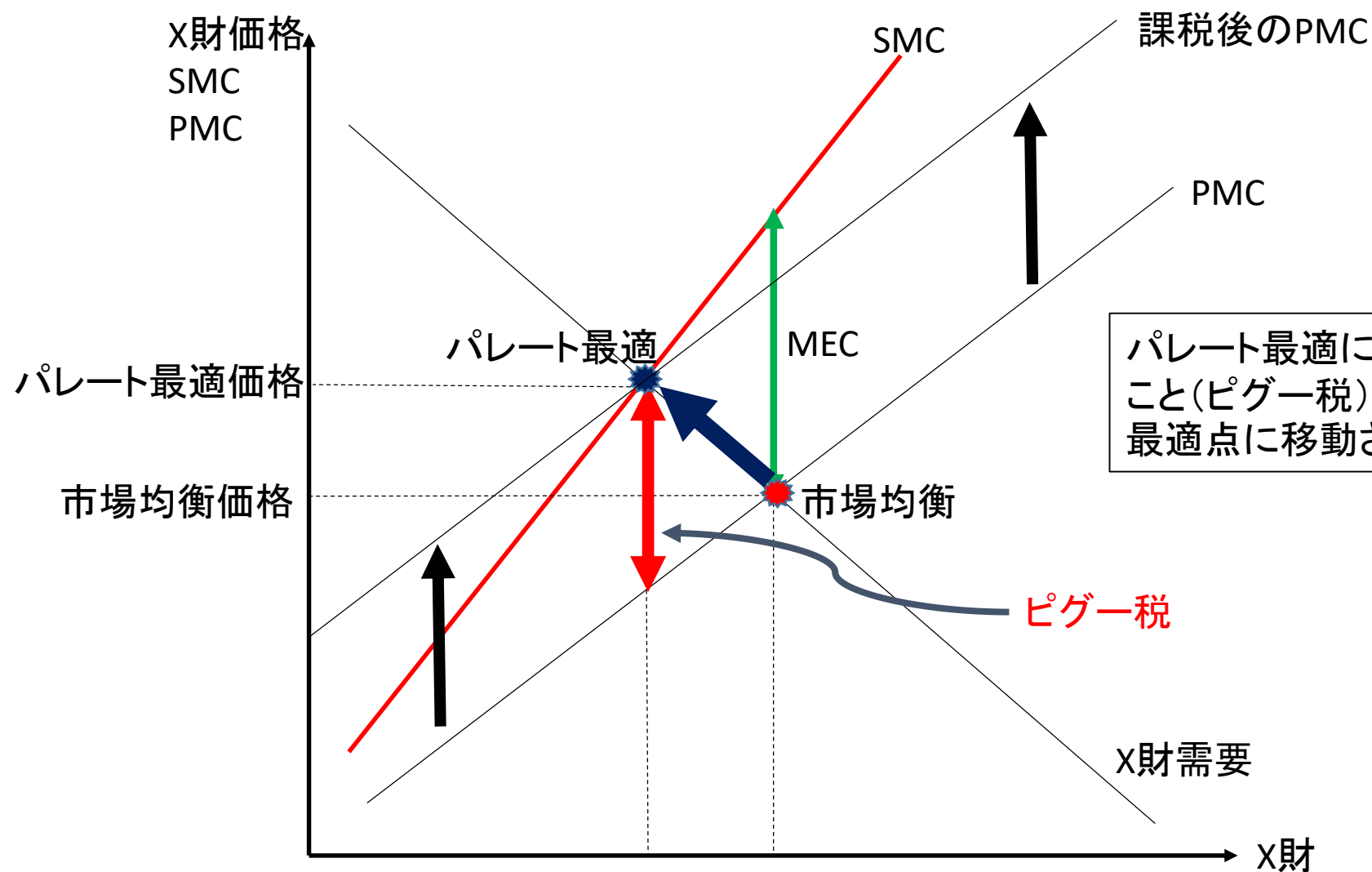
## 第4講

### 外部性②

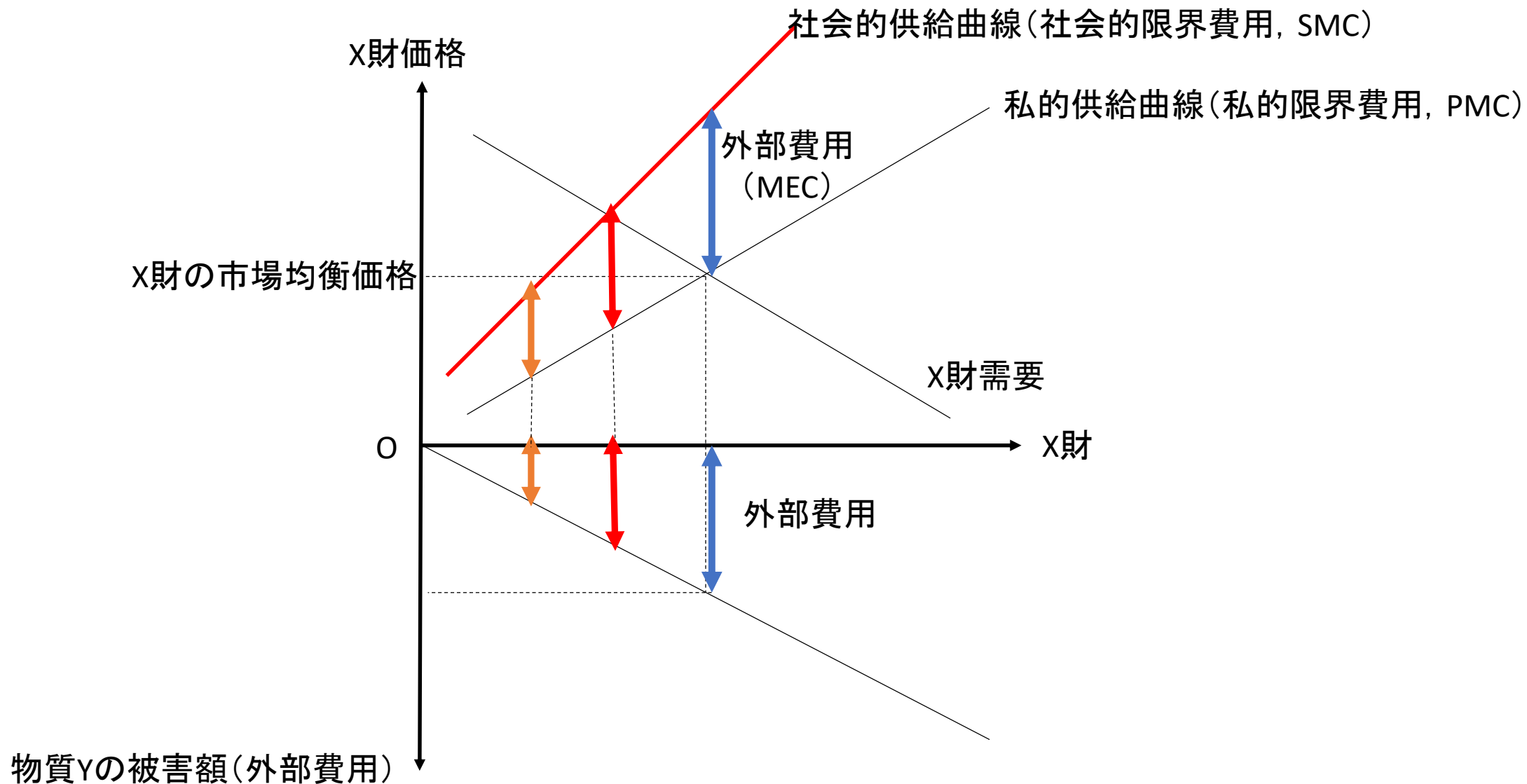
# ピグー税政策（外部性の内部化政策）

- パレート最適点における限界外部費用MECに等しいピグー税を課すことにより、私的限界費用PMCがシフトし、市場均衡点はパレート最適点と一致する。
- パレート最適点の位置を知るためには、社会的限界費用SMCを正確に知らなければならない。→ 限界外部費用MECを正確に知らなければならない。
- 限界外部費用MECを正確に測定することは困難である。
- 厳密な意味でピグー税政策が現実の世界で実施されたことは皆無である。  
（「温暖化対策税」、「ごみ有料化」、「産業廃棄物税」等は、ピグー税ではなく、ボーモル・オーツ税である。）
- ピグー税政策の次善的政策Second Best Policyとしての「ボーモル・オーツ税（Baumol=Oats Tax）政策」

# 復習 ピグー・モデル(課税政策＝ピグー税政策)



# 復習 ピグー・モデル(外部費用の導入)



# 復習 ピグー・モデル(外部費用の導入)

- 単純化の仮定

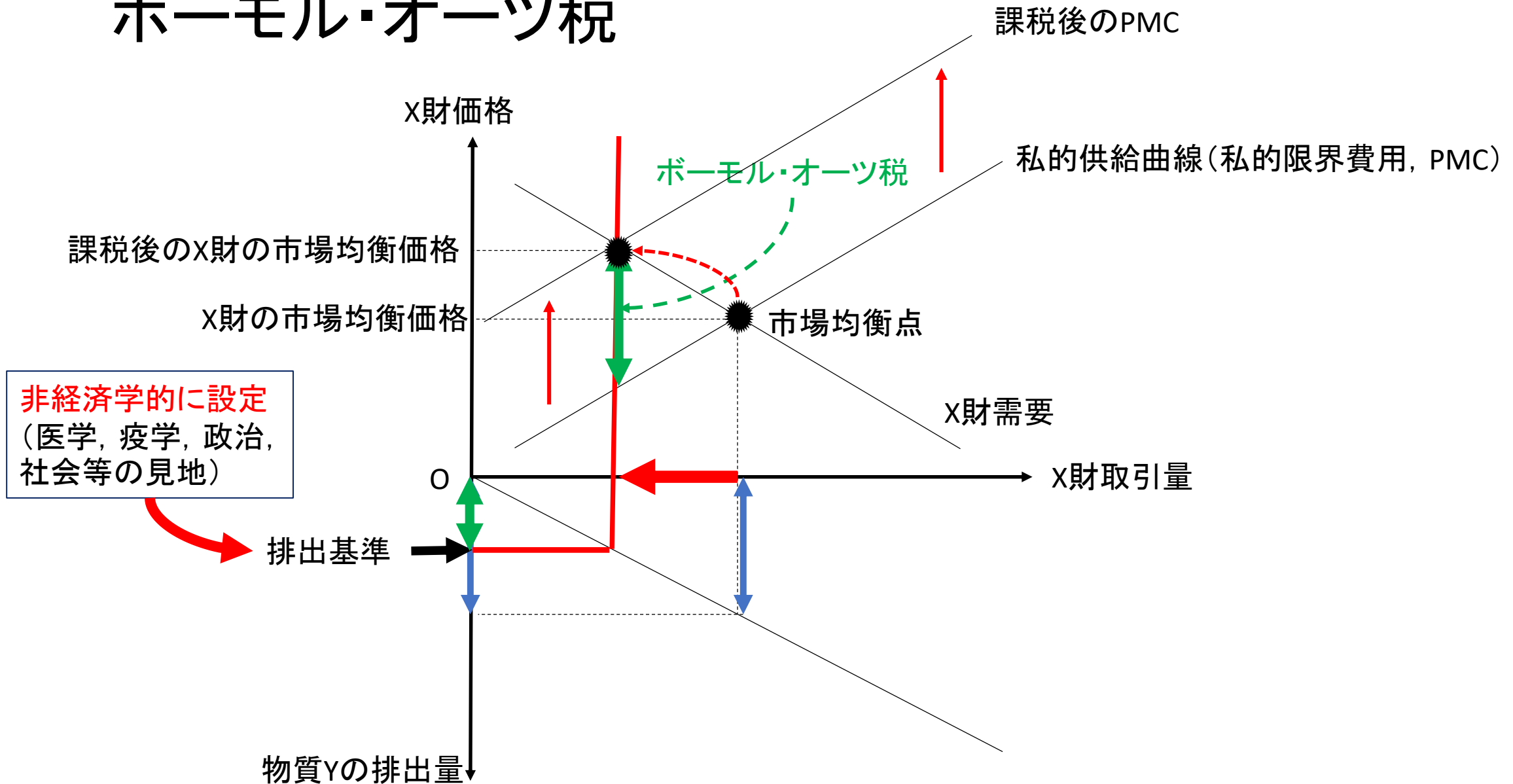
- ①X財生産1単位当たり, 物質Yは1単位排出される。

- ②物質Y排出1単位当たり, 消費者の被害は, 1円である。

# ボーモル・オーツ税 Baumol=Oats Tax

- ピグー税政策は、**正確な外部費用の計測が可能**であることを前提としているが、現実には困難である。
- そこで、ピグー税政策の次善政策 (Second Best Policy) としての**ボーモル・オーツ税 (Baumol=Oats Tax) 政策**が現実には実施されてきた。
- ボーモル・オーツ税政策は、パレート最適点の位置が不明 (限界外部費用MECが不明＝社会的限界費用SMCが不明) である場合の環境政策である。

# ボーモル・オーツ税



# ボーモル・オーツ税

- ボーモル・オーツ税政策は、**非経済学的(医学的, 疫学的, 自然科学的, 政治的, 社会的)**な見地から**排出基準を設定し**, その基準を守らせるための**経済的手法(課税政策)**である。
- ピグー税政策が、外部費用を内部化(外部性を市場取引の内部に価格化)する「**価格政策**」であるのに対し、ボーモル・オーツ税政策は、環境政策目標に主体行動を誘導する(排出基準を守らせるために、基準を超える排出量に対して課税する)「**数量政策**」である。
- 「温暖化対策税」、「ごみ有料化」、「産業廃棄物税」等は、ピグー税ではなく、ボーモル・オーツ税である。



# ピグー税政策とボーモル・オーツ税政策(まとめ)

- ピグー税政策: 外部不経済の発生＝外部費用(MEC)の発生→PMCとSMCが乖離→市場均衡点とパレート最適点が不一致→パレート最適点における外部費用分(MEC)に等しく課税政策を実施すること(ピグー税政策)により, 市場均衡点をパレート最適点に移動させること(**外部性の内部化**)ができる。
- ピグー税政策の前提は, MECが正確に計測されることであるが, 困難。  
→ピグー税政策の次善政策としてのボーモル・オーツ税政策
- ボーモルオーツ税政策は, 環境政策目標実現のための数量誘導(課税)政策である(ボーモルオーツ税政策は, **外部性の内部化政策ではない**)。
- **外部性の存在→内部化政策あるいは政府の政策介入が必要**  
(コース・モデルの政策的帰結と正反対)